＜今朝の聖書から＞

村上定幸

【向こう岸】今朝の箇所の少し前になりますが“「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った(6:26)”とあります。弟子たちもイエス様もおられないことに気付いた群衆は、おそらくそのうちの熱心な人たちだけでしょうが、皇帝の名をつけられた町ティベリアスから反対側のカファルナウムにやって来るという出来事の続きになっています。一連の出来事として聖書を読みましょう。

【主が感謝の祈りを唱えられた(6:23)】この箇所では、主が祈られたという言葉が使われます。最初の頃の教会は、外からみても分かったに違いありませんが、礼拝のたびに聖餐を守っていました。この“主が感謝された”という言葉も聖餐を示していると言ってよいでしょう。今日の終わりの箇所には“飢えることも渇くこともない(6:35)”とあることに気付きます。明らかに聖餐を示しています。今日でも聖餐式において牧師が、パンを高く掲げて祝福の祈りをささげるところがあります。この奇跡の出来事を示しているのだという話を聞いたことがあります。先に“外から見ても”と書きましたが、信仰者が礼拝を守るということは大変なことで、ティベリウスというローマの力と、ユダヤ人仲間からも仲間に入れてもらえないという環境に立つことを示しています。今日の箇所の次には、癒された盲人がユダヤ人からも追い払われてしまうという出来事が記されています(9章)。歴史を調べるまでもなく、このヨハネが教会のために贈ったこの福音書が読まれる礼拝は、肉体の生命そのものがかかわるほどに厳しいものだったことが分かります。そのような状況のなかでの記録です。

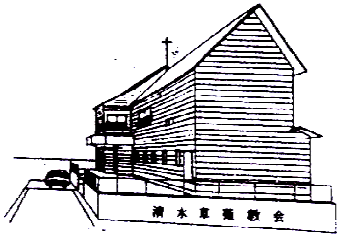
【人々の願い】このように熱心な群衆でしたが“主よ、そのパンをいつもわたしたちにください(6:34)”としるしを求めています。せっかく“来るべき預言者を今見た”と理解した人々とのすれ違いもまた示しています。“わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです(6:31)”とあることからもハッキリわかる通りに、出エジプトの出来事がここでは思い出されているのです。出エジプト16章では“人々が求めて”マンナを与えられました。しかしここでは、パンと魚の奇跡を主の方からなさっているのです。主は日毎の肉の糧を大切にされました。主の祈りで祈られる通りです(“主の祈り”の聖書の箇所では、いろいろの意味に解釈されるにしろパンという言葉が使われています)。

【しるし】30節に戻りましょう。“どんなしるしを見せて下さいますか”とあります。“さっきあなた方はしるしを見た(パンと魚の給食)、これがしるしだ”と仰り、、35節の“わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない”というのが答えであり、しるしです。見えているのに見えなくて困っているのです。

【朽ちる食べ物】27節に“そのために働き、稼ぎなさい”という実態のないような言葉で、今朝の箇所は始まります。“あなたと共にいる、キリストが見えていますか”と語られるのです。礼拝中でも、今月の残業時間数に一喜一憂するようなことないですか。それほどにまであなた方は、御言葉に一喜一憂していますかということ、ヨハネ福音書の始めにあるように、死の闇の中で御言葉は輝くのです(1:5)。主のくださる道の故に喜べますように祈りましょう。

週　報

２０１１年　１１月　１３日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042